



古村 伸宏

1～3月期は、仕事と仲間をみんなで増やす「123運動」に全国で取り組む時期である。並行して、昨秋行われた「よい仕事集会」を受けて、テーマ別の催しも目白押しだ。2月4、5日には、歴史ある「清掃」のよい仕事コンテストが大阪で開かれた。6回目となる今回は、「清掃」という仕事を持っている社会的価値が、地域に向けて発信され、清掃を生業とする組合員が、「クリーン・ケア」とでもいうべき役割を担う存在として、瑞々しく成長している様子がたくさん出された。とりわけ鹿児島県の病院清掃現場の若者たちの活躍と成長は目を見張る勢いだ。震災を受けた被災地に米を作って届ける取組みから、米作りを地域に呼び掛け、若者の輪が『結婚』という希望に向かって「婚活事業」を生み出し、介護の仕事開始や他現場の仕事縮小を我が事として受け止め、共に「仕事をおこそう」と呼びかけ行動する…。「清掃」という仕事の社会的評価は決して高くない。最低賃金ぎりぎり働くのが業界水準だ。しかし、「清掃」を業務としてだけでなく、安全で快適な空間を作り出す、クリエイティブで生きる基礎となる価値を確立する営みとして捉え、その範囲を広げる努力が、人の成長・発達とつながりを強力に進めている。翻って、介護や子育てなどの「ケア」と呼ばれる領域の事業が広がってきたが、その基礎にある「人間らしく暮らす・生きる」基盤づくりと清掃は、密接不可分である。

しかし、子どもたちが清掃の価値を実感する実践は、一部の学校ではあるものの、「ケア」の領域では埒外に置かれている。

今回のコンテストは、「清掃を科学する」方向性と、「清掃学」を確立し発信すること。それが清掃の社会的価値を高める運動へと結び、他業者の清掃労働者との社会連帯活動が始まる…。そんな希望が具体化することを確信するものとなった。今後さらに、子育てフォーラム(2/11.12)、ケアワーカー集会(2/26)、菜の花ネットワークフォーラム(3/1.2))と続く催しは、清掃コンテストの到達点を受けて進められなければならない。

2月7、8日に開かれた「地域労協会議」では、「仕事おこし」を中心使命とする覚悟を固める機会となった。労協ながのの「全現場仕事おこし企画書づくり」が、様々な物語と成果を生み、これが全国化する段階である。必ずくぐることになる「なぜ仕事おこしをするのか」という議論が、狭い現場の業務という垣根を超え、暮らし生きる地域を舞台に、市民との接点や共感を伴いながら「社会連帯運動」を伴って「仕事おこし」が始まる法則性を生み出しつつある。このながのの実践の中心も「清掃」現場である。そして中心テーマ・突破口は「FEC」である。

震災復興と新しい日本社会という挑戦課題は、「大きな構え」と「ち密な戦略」が求められる。しかし、問われるのは自らの「覚悟」と「決意」である。